

## 第20期第6回常任理事会議事録

日時 昭和54年2月23日(水) 15.00~17.30

場所 気象庁予報部会議室

出席者 小平, 奥田, 河村, 神山, 関根, 新田, 山下,  
松本, 増田

## 報告

〔庶務〕 1. 1月22日, 日本気象協会会長井上五郎氏から, 昭和54年度岡田賞受賞候補者推薦について依頼がきた(締切3月20日).

2. 1月26日, 日本科学技術情報センター丹羽賞事務局長から, 第14回「日本科学技術情報センター丹羽賞」の推薦の依頼がきた(締切2月15日).

3. 2月6日, 自然災害科学総合研究班代表者石原安雄氏から, 第16回自然災害科学総合シンポジウム開催についての後援依頼がきた(9月23~24日, 郡山市日本大学).

4. 2月17日, 当学会九州支部から, 講演要旨集第2号が送られてきた.

〔天気〕 書誌記述に関するアンケート調査については図書管理室に依頼した.

〔講演企画〕 3月2日(金)春季大会のプログラムを編成する. 秋季大会のシンポジウムとして“気象に関する室内実験”を取り上げたい. 最終的には九州支部で決めて貰う.

〔教育と普及〕 関西支部から夏季大学教室について次のとおり連絡があった. (1)日時: 54年8月上旬の3日間 (2)場所: 大阪管区気象台会議室(予定) (3)人数: 70名(限定) (4)会費: 2500円 (5)テキストは東京で作ったものを参考書として使いたい (6)日程:

	午前	午後
第1日	大気大循環と日本の天気	小気候と局地気象
第2日	天気図の見方と利用法	天気図の見方と利用法
第3日	衛星写真から見た日本の天気	気象台のシステム, 映画説明

議題 1. 通常会員, 賛助会員の増強策について (1)通常会員増加については“天気”2月号に申込書を添えて告示し会員各位へ協力依頼をした. (2)地方理事, 各支部役員あてには, 会員

増強についての協力依頼(案)が了承され理事長名で依頼することになった. (3)賛助会員については次回で検討することとした.

2. 昭和54年度春季総会提出議題について (1)山本賞(気象学会の部)受賞者選定規程に関する件. (2)山本賞の設定に伴い, 学会賞受賞者選定規定および藤原賞(気象学会の部)受賞者選定規定を一部改正する件. (3)日本気象学会定款のうちの細則の一部改正の件 以上3件原案了承, 全理事の書面審査を受けることとする.

3. 昭和54年度財政の見直しについて 昨年11月14日の理事会で昭和54年度予算書の第1次案について原案は了承されたが, その後検討した結果, 次の通り手直しを行ない最終案を作成した. (1)会員数は, 第1次案では, 53年8月30日現在としたが, 最終案では, 本年2月1日現在で算出した. (2)印刷費は10%増を8%増に変更した. なお, 天気に“ひまわり”の画像とその説明を掲載し同誌の広告頁の紙質を改善する. 夏季大学を地方(関西)で開催するための経費も計上した. (3)会議費については, 「教育と普及委員会」に1万円増の2万円とし, 春季大会の会場借上費20万円を追加計上した. (4)予備金は, 理事会の申合わせにより10万円増額し, 40万円とした. (5)奨励金は, 1件2万円増とし, 7万円とした. (6)山本賞基金は, 総会決定により受領できることとなるが, 予算書(案)には基金の方に計上しておくこととした.

以上修正した結果, 第1次案より繰越金が200万円減額となった. この最終案を経緯を付記して地方理事へ送付することとした.

4. その他 (1)昭和54年度岡田賞受賞候補者推薦については, 新田理事が岸保理事長と相談する. なお, 今後該当者をリストに入れておく. (2)第16回自然災害科学総合シンポジウム(9月23日~24日, 於郡山市日本大学)の後援依頼につき, 後援することを了承. (3)“天気”の広告誌面の改正について “天気”の

(P. 304へ続く)

層に逆転層が残り、解消する際にはそれより上層と下層の混合が進行していく過程が観測された。

市中心部と7km離れた地点の2ヶ所で同時観測を行った結果、heat island 下層の気温の垂直分布が得られた。その結果、逆転層の上限は郊外の方が中心部のそれに比べて高いことがわかった。

#### 4. 札幌市の大気環境（その2）

平松 親（北海道大学環境科学研究所）

孫野長治（北海道大学理学部）

既存の観測資料を使用して、札幌市における冬季のSO<sub>2</sub>濃度と風速の日変化を、水平分布にも注意して解析した。市内7個所のSO<sub>2</sub>観測地点では、朝と夕にピークをもつ二山型の日変化がみられ、市の中心部に近いほど高濃度となった。一方、風速は、日中をピークとする一山型で、(西を除き)市の中心部に近いほど弱風となった。SO<sub>2</sub>と風速の逆相関関係は、風速の混合拡散の効果のみならず、ビルがその暖房で汚染源となったり、粗度を大きくして風速を弱めることが加わるためと考えられる。第3点は、風速の水平分布で、市西部山麓から中心部が弱風域となり、郊外の強い風の区域がビルの密集域を避けるように市街地に入り込むことからわかる。また、SO<sub>2</sub>の日中の濃度は、風向風速の日変化から、主な汚染源(市の中心部)に対して風上が低濃度、風下が高濃度であり、同じSO<sub>2</sub>二山型の日変化にも若干の差異がみられた。

#### 5. 煙の運動の不連続性について

石崎健二（北海道大学工学部）

煙突から出た煙塊は、浮遊中の数十秒間が観測の対象となるが、その間で1~2回風下方向の速度が10~20%急変することが、しばしば観測された。速度の急変は隣り合った、または離れた2個の煙塊で同時に生じたり、ある位置で急変が現われると次々にやってくる4個の煙塊がほぼ同じ位置で、ほぼ同じ速度に急変する例があった。垂直方向および横方向の速度、また、煙塊の形について、対応する不連続的な変化がないか、少し調べてみたが、風下方向速度の場合ほどには判然とした結果はま

だ得られていない。

#### 6. 冬期北陸における雷雲の下での大気電気の上観測

遠藤辰雄（北海道大学理学部）

坂本洋和（赤平西高校）

谷口 恭（北海道大学理学部）

1977年度の冬期、石川県河北潟で行なった観測の結果、地上電位傾度と降水電荷の間には負の相関がみられた。また、300μm以下の粒子からなる空間電荷は降水電荷と符号が一致していた。しかし、小イオンは、これと独立に電場の変化と酷似し、電極効果に依っていると考えられる。地電位の変化は強い雷雲の下でも900mで60mVと小さく、先の負の相関を説明するには不十分である。この負の相関を説明するために、空間電荷を地上電位傾度の下端のターミナルと考えることを提案した。これは今のところ、電場と降水電荷の負相関を定性的に説明することができる。落雷に伴って地上の空間電荷と小イオンの記録に負の異常な高まりがみられ、高速電子の放射と関連あるものと考えられる。

#### 7. 粉体の帯電について

志尾 弥（北海道教育大学）

大雪山旭岳姿見付近(高度1970m)で地吹雪の電荷測定をした。測定方法はFaraday cage法と交直流電場法を用いた。ここで採集した粒子は、0.1mm以上の大きな雪粒子である。この範囲の粒子については、電荷符号と粒子の大きさには相関性は見られなかった。観測のみでは地吹雪の荷電機構を解明できないので、室内実験を行なった。観測期間中の地吹雪は2種類に分けられ、一つは新雪の地吹雪で他はサスツルギを作る地吹雪である。そこで、①新雪をcompressorで吹き飛ばしその粒子の電荷を電場中の軌跡で解析した。その結果粒子の大きさによる荷電極性は見られなかった。②積雪をcompressorで吹き飛ばしこれをFaraday cageで測定した。この結果では積雪面がprism面に近いほど負に荷電し、また、-6°Cより暖かい大気温度では、いづれも(basal面, prism面)正に帯電することがわかった。

(P. 312より続く)

広告は、科学技術社と契約書を取り交わしているが、契約更新を機会に、天気編集委員会での改正案について山下理事から次のとおり提案があった。(a)表紙2(表紙裏)に投稿規程を入れるためあけて欲しい。(b)本の体裁上前付の広告を後にまとめられないか。できた

ら賛助会員名簿を前に出したい。これについて、河村理事から最初契約した時の経緯について説明があり、下交渉については会計・庶務担当理事に一任した。その際広告誌面の紙質の改善について申し入れることとした。

承認事項 小尻利治ほか24名の新入会員を承認。